

沖縄国際大学日本語日本文学研究
第17巻第2号（通巻第31号）
（平成25年3月1日発行）

言語地図にみる宮古語の地域差

仲 原 穰

言語地図にみる宮古語の地域差

Local difference of the Miyako language viewed
from the linguistic atlas

仲 原 穰
NAKAHARA Jo

1. はじめに

宮古島とその周辺の島々（池間島、来間島、大神島、伊良部島、多良間島、水納島、下地島）は「宮古諸島」と称する。宮古諸島で伝統的に話されていることばは「宮古方言」、「宮古語」などと名付けられている¹。ただし、宮古諸島のうち下地島は、元々無人島であったため伝統的な言語を有していない。一方、水納島はかつては伝統的な集落があったが現在は集落のほとんどが宮古島高野集落へ移住したため、集落としては存在しない²。特に2009年にユネスコがこの地域のことばを「宮古語」とし、危機に瀕している言語の一つに加えて以来、「宮古語」と称する論考が増えている。他の地域とのコミュニケーションが取れないほどの差異があり、沖縄諸島や八重山諸島との差異が明らかであるため、この「宮古語」という名付けも首肯できる。

しかし、宮古語を用いる集落のすべてが同じことばを話しているのではない。宮古語にも下位区分もあることは、先行研究でも明らかになっている。主なものを紹介すると、仲宗根（1987 [1962]）では「宮古方言」を「宮古本島方言」「伊良部方言」「多良間方言」に三つに下位区分している。また、狩俣（1997 [1992]）では以下のように五つに下位区分している（p.389）。

宮古方言をさらに下位区分すると、1）宮古本島方言（来間島も含む）、2）大神島方言、3）池間島方言、4）伊良部島方言、5）多良間島方言（水納島も含む）の5つに分かれる。

さらに、内間（1984）では、「本島北部方言（大浦・島尻・狩俣）と本島南部方言（大浦・島尻・狩俣以外の集落）に分けられる。」と述べ、宮古島内にも下位区分がみられることを指摘している。

本来、「宮古語」の下位区分を正確に示すためには、宮古諸島のすべての集落の音韻・文法・語彙を精密に調査し、比較研究する必要があるが、未調査集落に限定しても、非常

に多くの時間を要する。

そこで本稿では、宮古語の「言語地図」を利用し、宮古語のなかの「地域差」について考えてみたい。この「地域差」は単語ごとに作成した言語地図によって異なっており、それぞれの言語地図に「地域差＝似た語形を用いる地域群」がみられる。このような「地域差」を重ねると、方言間の「親近性」もみえてくるだろう。よって今回は、宮古語の言語地図のなかから、主に地域差が顕著にみられるものを提示し、論じてみたい。

今回使用する宮古語の言語地図の言語資料は、「沖縄言語研究センター」が1979年から実施した「琉球列島言語の研究」の「調査票」（第1～第4）と「全集落調査票」を用いた調査データが主であるが、未調査の語彙や当該地域の語形ではないと判断される集落については、補足調査によって得られた言語資料で補った。

本稿で用いる「言語地図」はデータベース・ソフト「FileMaker Pro 9」を用いて作成した³。地図に記された「記号」は、各集落で用いられる語形の一部分を表象し、記号化したものである。実際に作成した「言語地図」では、「記号」を色分けし、似た特徴を持つ語形を寒色や暖色、ひらがなやカタカナ、アルファベットなどによってグルーピングしている。本稿ではモノクロでも語形の違いがわかるように「記号」の書体や文字の種類を変えて示し、具体的な語形は地図下方部の「凡例」に示した。ただし、言語地図によっては、未調査のままの集落や調査ミスとみられるものもあった。その場合は地図に「記号」を示さず、空白とした⁴。

なお、本研究は平成22年度科学研究費基盤研究（B）「琉球宮古方言の言語地理学的研究」（課題番号22320086、代表者西岡敏）の成果の一部を利用したものである。

2. 母音の特徴

2-1 中舌母音 /i/ の分布

中舌母音⁵を有するのは宮古語の特徴である。宮古諸島では図1【らっかせい】⁶に示すように、すべての地域に中舌母音 /i/ が認められる⁷。

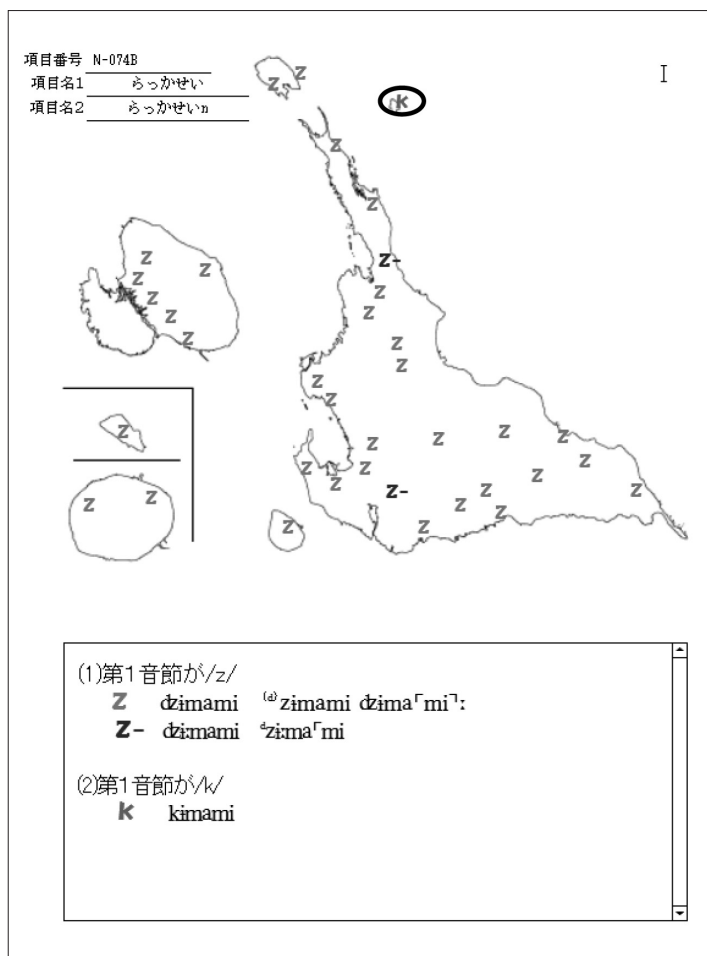


図1 らっかせい

2-2 /i/を失いつつある方言

ただし、池間系方言（池間、前里、佐良浜、西原）や水納島方言などでは、中舌母音ではなく、前舌母音 /i/ に対応する場合もある（図2「鳥」）。なお、日本語（標準語）の「リ」が、/ri/ や /ɾi/ でなく成節的な子音 /L/ へと変化した地域もみられる（伊良部方言・多良間方言）。

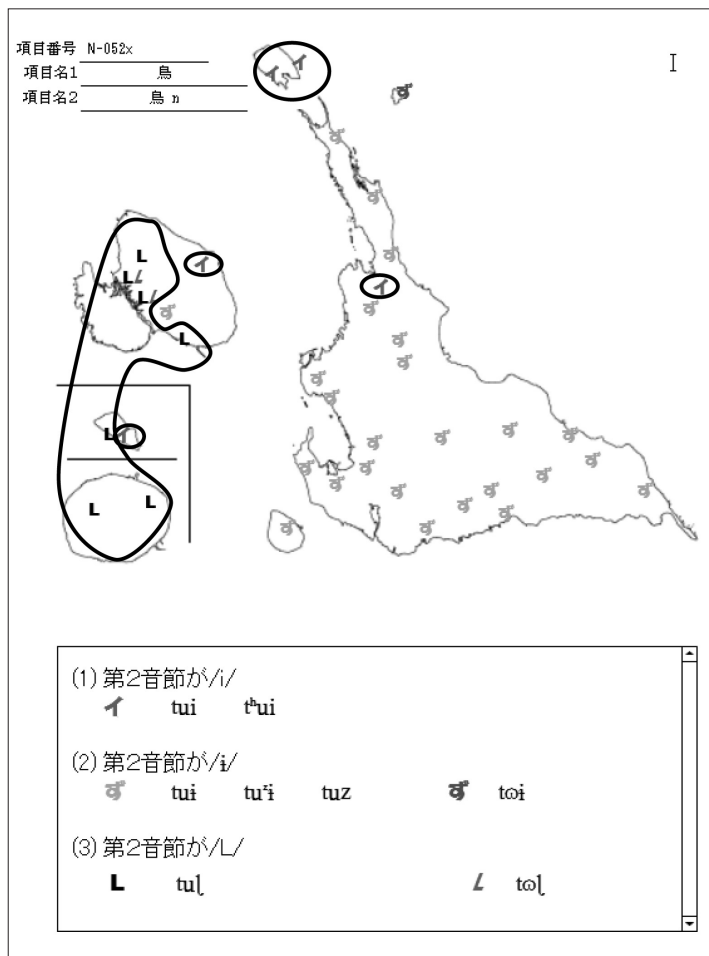


図2 鳥

この /L/ は分布が異なる地図もある (図3 [針])。このことは単語ごとに伝播状況が異なるものもあることを表している⁸⁾。

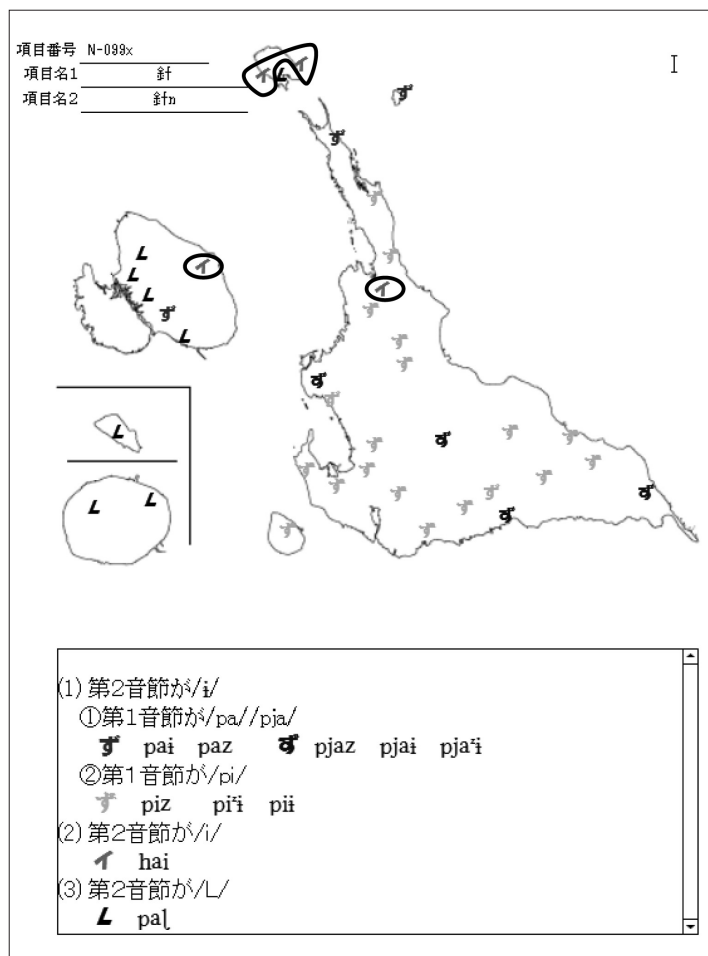


図3 針

2-3 連母音の融合の有無

図4【どう、どうして】に示したように、宮古諸方言のうち、いくつかの方言で母音が融合せずに連母音を保つ方言がみられる。この連母音の融合も／L／の対応と同様に、単語ごとに異なる分布をみせる（図5【だれ】）。特に宮古島北部（池間島、伊良部島など）と南部の一部（新里や新城など）では連母音が融合しづらいのがわかる。

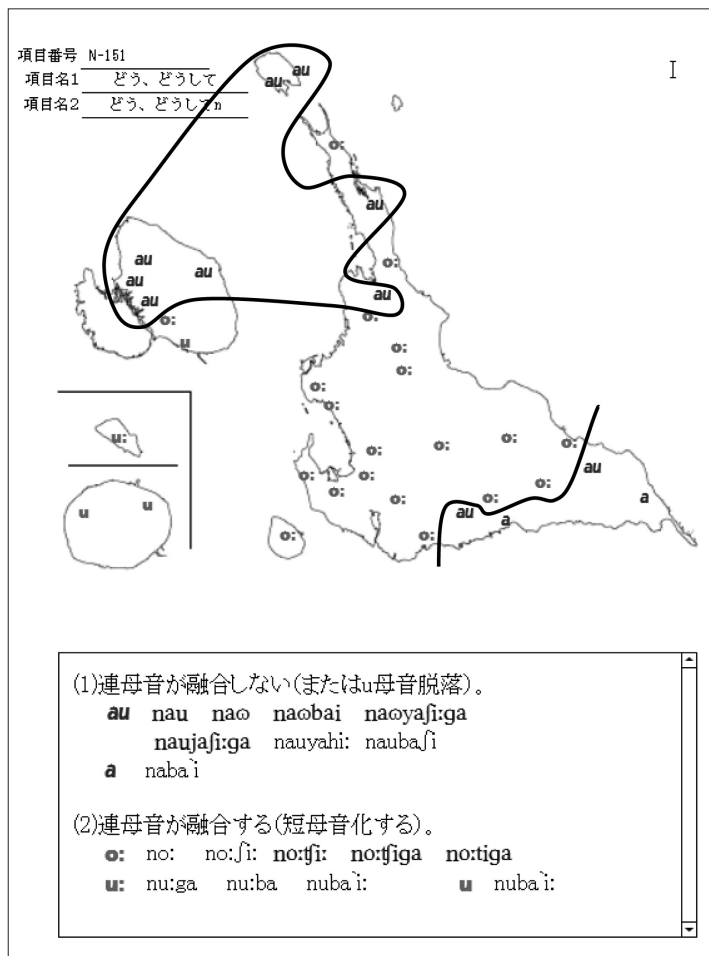


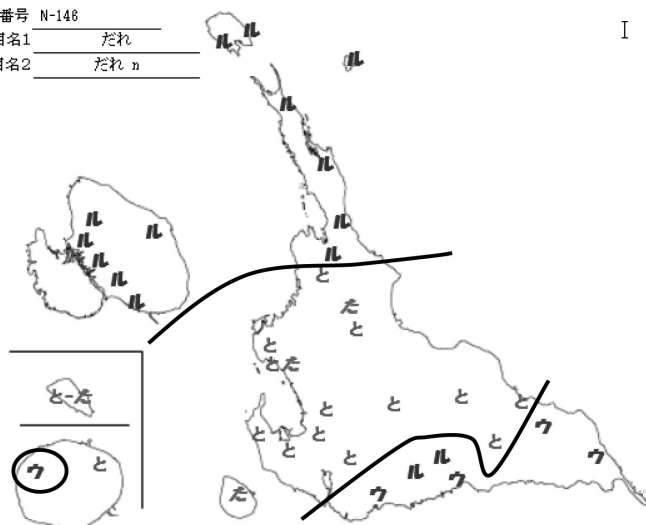
図4 どう、どうして

項目番号 N-148

項目名1 だれ

項目名2 だれ n

I



(1) 連母音がくっつかない

ル taru

ウ tau

(2) 連母音がくっつく

と to:

とー to:re:

た ta: (北琉球と同じ語形)

図5 だれ

3. 子音の特徴

3-1 /p/音の有無

宮古諸方言の多くの方言で日本語の「は行音」にはp音が対応するが、池間系の諸方言ではh音化している（図6【鼻】）。しかし、図7【齒】では池間島の字池間や宮古島西原にP音の語形がみられる。これについて平山（1964）は、本来はP音であり、世代差による変化によってh音になったと論じている⁹。

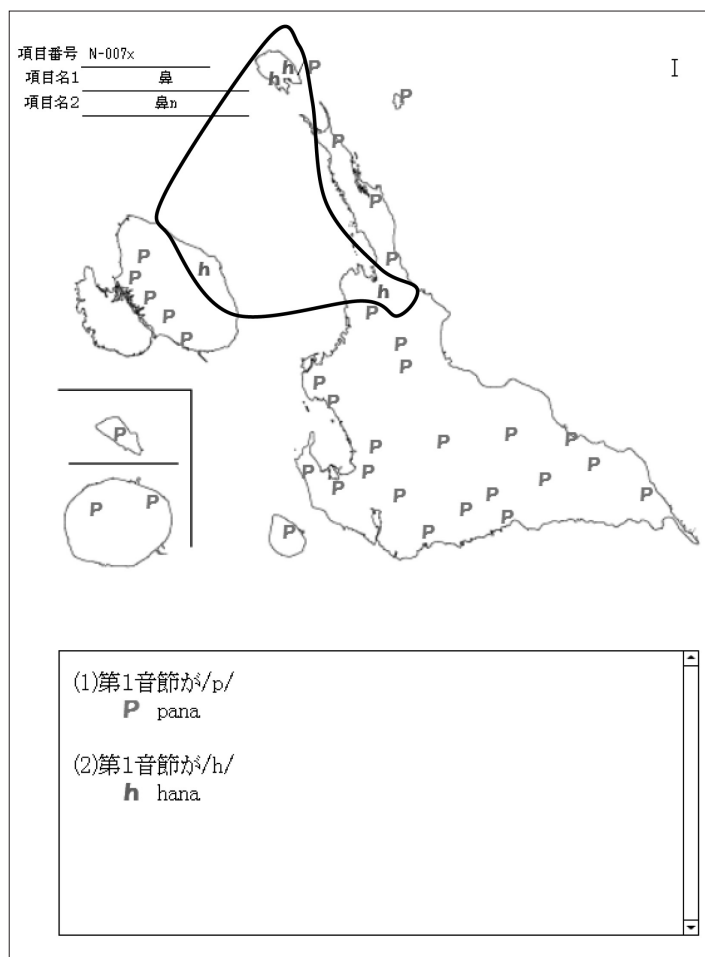


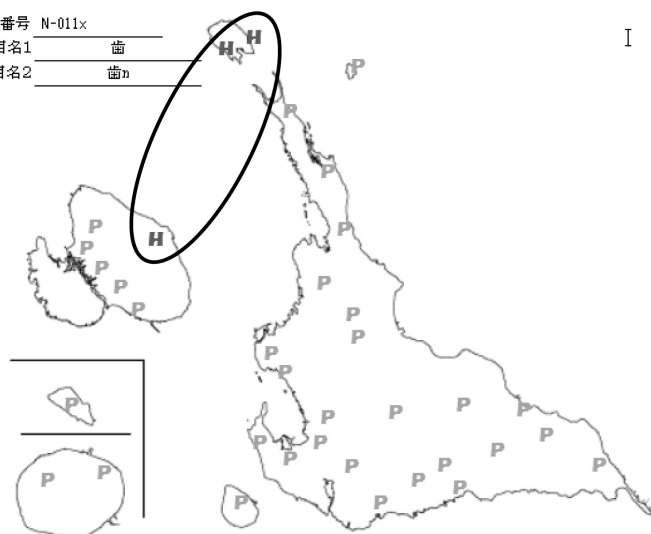
図6 鼻

項目番号 N-011x

項目名1 齒

項目名2 齒h

I



(1) 第1音節が/p/

P pa:

(2) 第1音節が/h/

H ha:

図7 齒

3-2 破擦音化（硬口蓋化）

破裂音 /k/ /g/ の破擦音化

ここでは特に破裂音が破擦音化（/c/ /z/）する現象を取りあげる（図8〔肝〕、図9〔さとうきび〕）。この変化を起こすのは、池間系の諸方言の他、伊良部方言や宮古島南部方言の一部（友利、保良、福里、来間島）などである。

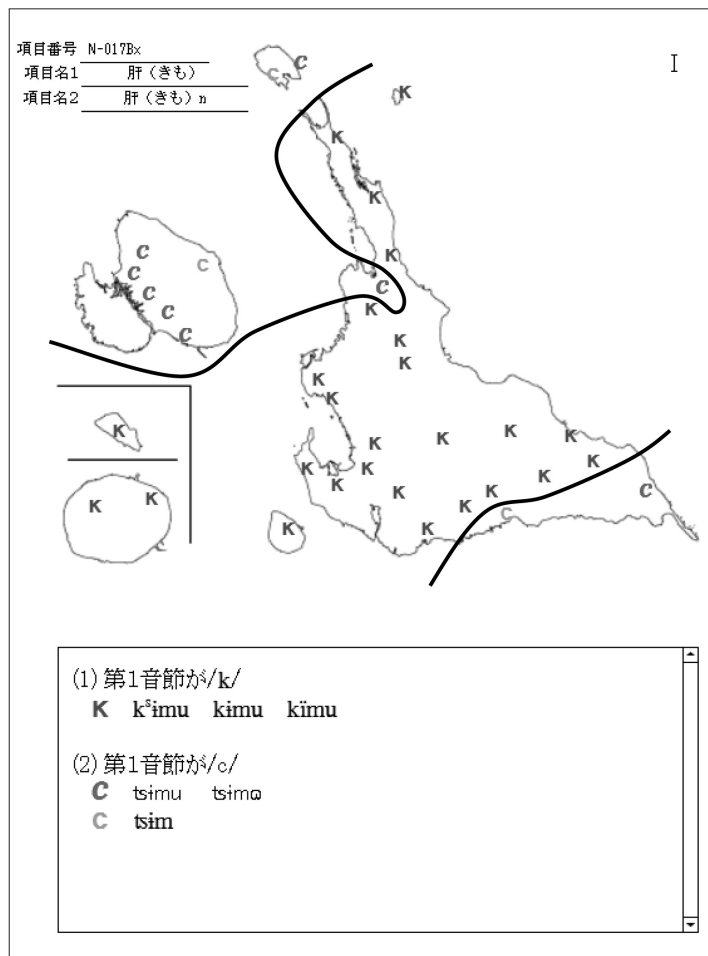


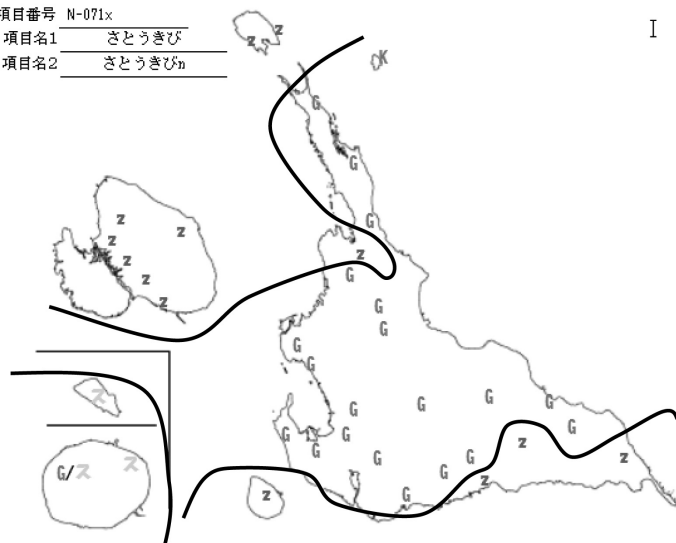
図8 肝

項目番号 N-071x

項目名1 さとうきび

項目名2 さとうきび_n

I



(1)最終拍が^s/g/または/k/

G bu:gi

K pø:ki

(2)最終拍が^s/z/

Z bu:ði bø:ði bu:z

(3)第1拍が^s/s/

S sidɕa jidɕa

図9 さとうきび

破裂音 /t/ が破擦音 /c/ になる現象がみられる方言群がある (図10 [天]、図11 [手])。宮古島では北部の島尻、南部の保良、友利、宮国であり、伊良部島の国仲でもこの現象がみられている。

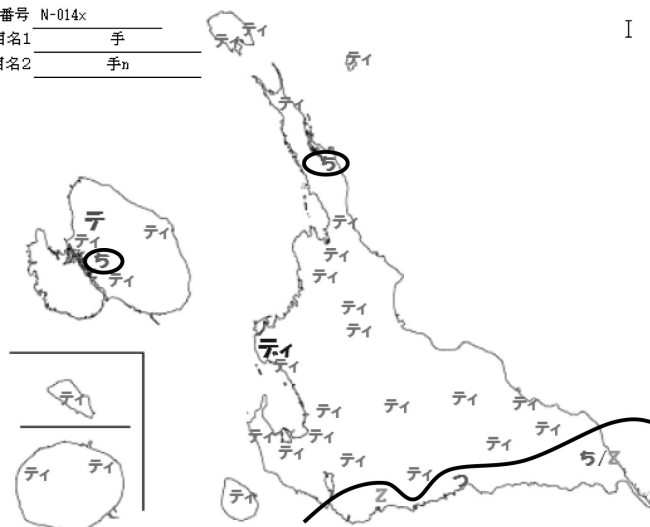


項目番号 N-014x

項目名1 手

項目名2 手_n

I



1.「て」由来

(1)第1音節が^s/t/

テ ti:

テ te:

(2)第1音節が^s/c/

チ tʃi:

つ tsi:

2.「うで」由来

(1)第2音節が^s/d/

テ^s u₂di

(2)第2音節が^s/z/

テ^s u₂dʒi

図11 手

3-3 成節的子音 /M/ の有無

宮古方言では唇を閉じる「ン」 /m/ と閉じない「ン」 /n/ とで意味を区別する地域がある。図12【土】の m で示した地点（主に宮古島北部、池間島字池間を除く全地域）は、成節的子音 /M/ を有する可能性がある地域である。通常の撥音は後続する子音と同じ調音点になるが、M で示した地域では後続子音が歯茎音 /t/ であっても両唇音 /m/ の「ン」になる。当該地域でミニマル・ペアが確認されれば音素 /M/ が認定できる。

ちなみに、この成節的子音 /M/ がみられる地域（図12【土】）と日本語（標準語）「に」が撥音化する地域（図13【荷】）は重なっていない。

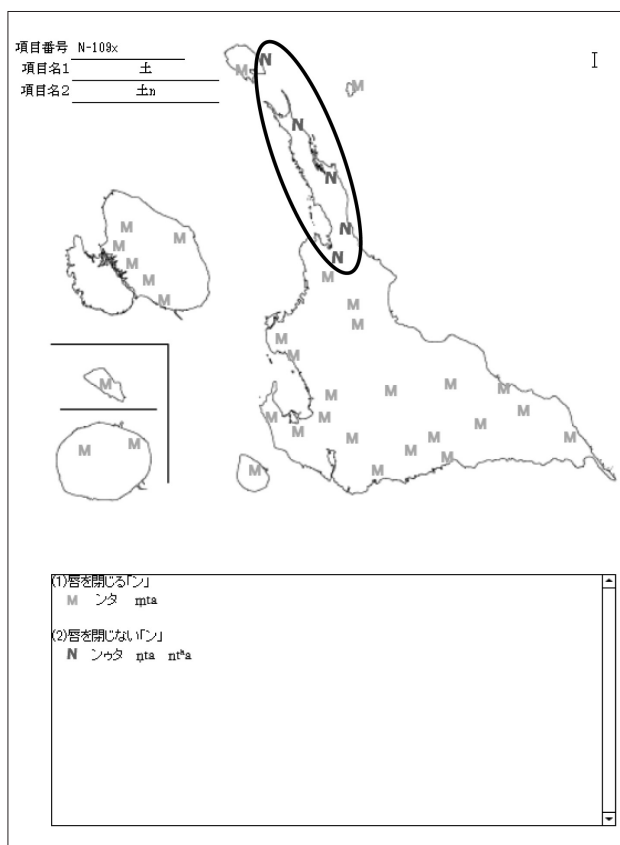


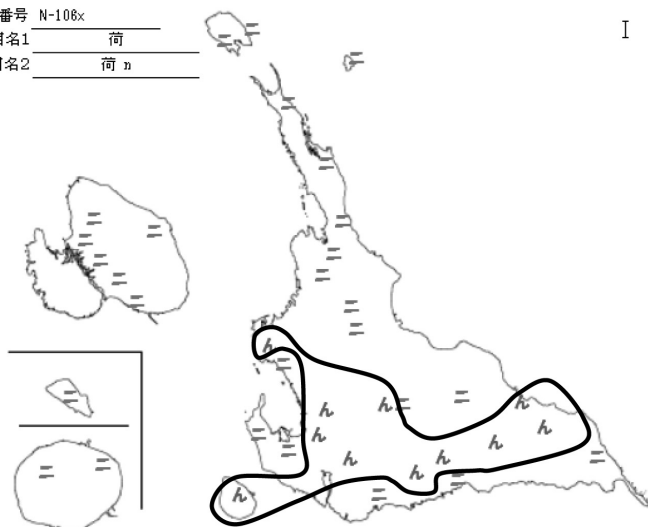
図12 土

項目番号 N-106x

項目名1 荷

項目名2 荷 n

I



(1) 第1音節が「二」
二 二- ni nimusi

(2) 第1音節が「ん」
ん ン- n: ʔn:

図13 荷

4. その他の諸現象

最後に、上記以外にみられる子音変化による地域差の言語地図を紹介したい（図14【風】、図15【節】、図16【毛】、図17【竿】）。

14【風】は破擦音の破裂音化であり、池間系諸方言と多良間諸方言にみられる現象である。

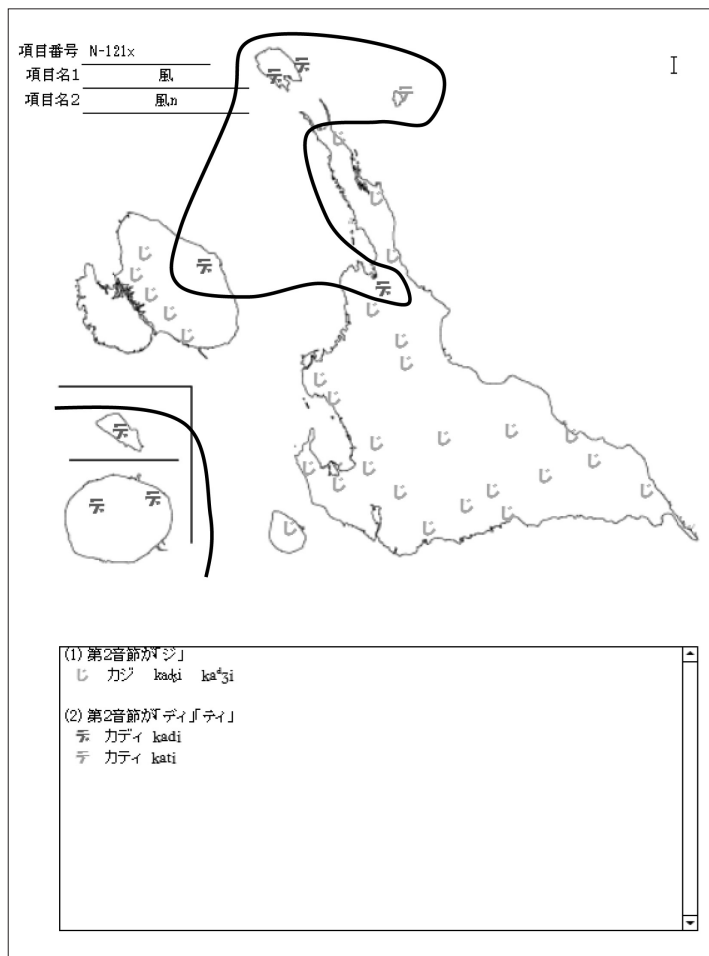


図14 風

つぎに示す図15【節】は摩擦音の弱化和破裂音化（/k/ /g/）を示している。子音が弱化するのは宮古島中南部方言の一部と伊良部方言の一部であり、破裂音化しているのは宮古島北部および多良間島、水納島方言、伊良部島方言の一部である。

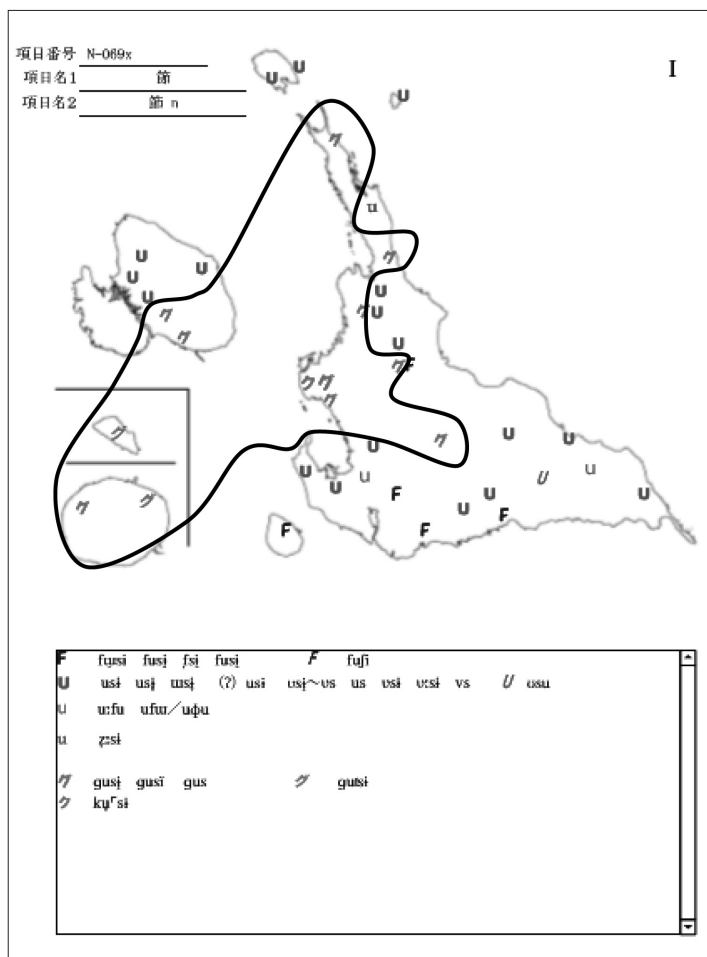


図15 節

図16〔毛〕は語頭の有声音化を示しており、破裂音 /p-/ が有声音 /b/ になる地域は宮古島北部の狩俣、島尻、大浦である。この地域が成節の子音の有無でも他と異なる特徴を持つことは、すでに図12〔土〕で述べたとおりである。

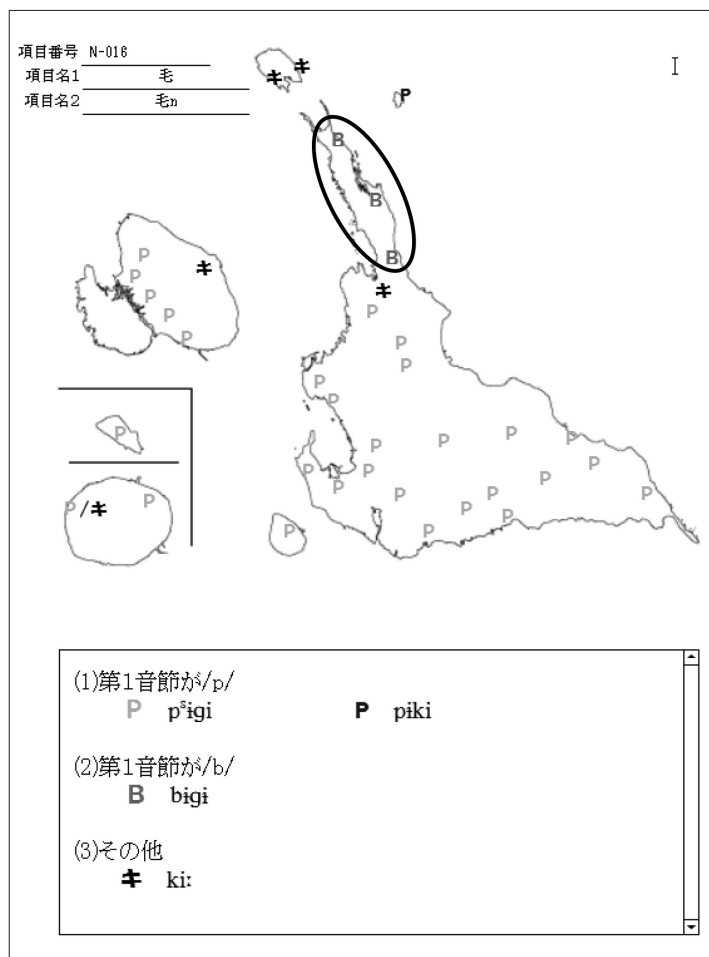


図16 毛

つぎの図17〔竿〕は、直音の拗音化の例である。拗音化するのは多良間島の塩川、仲筋、水納島の水納である。この地域は図9〔さとうきび〕でも別系統の [sidʑa] (塩川、仲筋、水納) や [ʃidʑa] (水納) を用いる地域である。

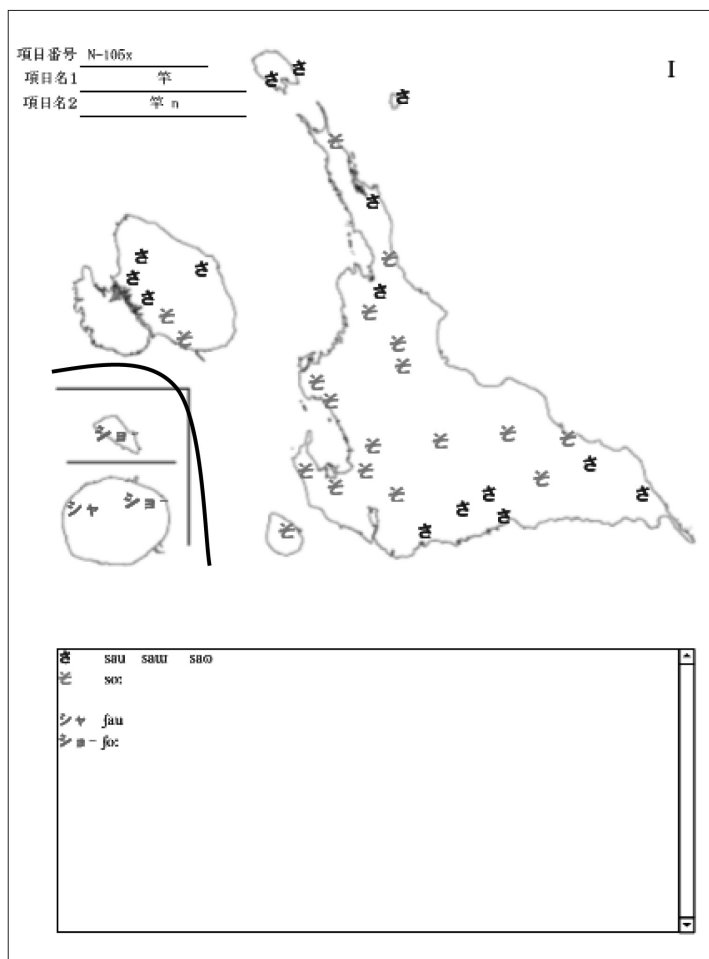


図17 竿

5. 宮古語の地域差

ここまで、宮古語の言語地図を手掛かりに地域差をみてきた。

具体的に述べると、図1【らっかせい】では中舌母音の分布、図2【鳥】と図3【針】では中舌母音の有無と /L/ に変化する地域、図4【どう、どうして】と図5【だれ】では連母音の融合しない地域、図6【鼻】と図7【歯】では /h/ 音化する地域、図8【肝】と図9【さとうきび】では破擦音化 /k/ /g/ /c/ /z/ する地域、図10【天】と図11【手】では破擦音化 /t/ /c/ する地域、図12【土】では成節の子音 /M/ にならない地域、図13【荷】では「に」の撥音化がみられる地域、図14【風】では破擦音の破裂音化がみられる地域、図15【節】では摩擦音の弱화가みられる地域、図16【毛】では語頭の有声音化がみられる地域、図17【竿】では直音が拗音化する地域である。

その結果、それぞれの言語地図から以下のような「地域的なまとまり」があることが確認された。

表1 宮古語の言語地図にみられる「地域的なまとまり」

| 番号 | 地域的なまとまり (集落名) |
|----|---|
| 1 | /i/ 宮古語全域に分布。/k/ 大神 |
| 2 | /i/ 池間、前里、佐良浜、西原 /L/ 佐和田、長浜、国仲、伊良部；水納、塩川、仲筋、(前里) |
| 3 | /i/ 池間、前里、佐良浜、西原 /L/ 佐和田、長浜、国仲、伊良部；水納、塩川、仲筋、(前里) |
| 4 | /au/ 池間、前里、佐良浜、西原、島尻、佐和田、長浜、国仲、新城、新里 /a/ 友利、保良 |
| 5 | /taru/ 池間、前里、佐良浜、西原、島尻、大浦、佐和田、長浜、国仲、仲地、伊良部、砂川、友利、新城、保良、新里 /tau/ 宮国、仲筋 |
| 6 | /h/ 池間、下里、佐良浜、西原 |
| 7 | /h/ 池間、前里、佐良浜 |
| 8 | /cimu/ 池間、西原、佐和田、長浜、国仲、仲地、伊良部 /ciM/ 前里、佐良浜、友利 |
| 9 | /buRz (i) / 池間、前里、佐良浜、西原、佐和田、長浜、国仲、仲地、伊良部、来間、友利、福里、保良 /siQzja/ 塩川、仲筋、水納 |
| 10 | /c-/ 島尻、国仲、友利、保良、宮国 |
| 11 | /-c-/ 島尻、国仲、友利、保良 /-z-/ 宮国 |
| 12 | /N/ 池間、西原、狩俣、島尻、大浦 |
| 13 | /N/ 久貝、砂川、福里、比嘉、新城、川満、洲鎌、嘉手苅、新里、来間 |
| 14 | /-d-/ 池間、前里、佐良浜、西原、塩川、仲筋、水納 /-t-/ 大神 |
| 15 | /g-/ 仲地、伊良部、狩俣、大浦、荷川取、東仲宗根、久貝、松原、野原、塩川、仲筋、水納 /k-/ 久貝 |
| 16 | /b-/ 狩俣、島尻、大浦 |
| 17 | /sj-/ 塩川、仲筋、水納 |

表 1 により、宮古語のなかで似た特徴を持つ地域は、以下の 6 種類になると考えられる。

- (1)宮古島北部方言、南部方言（来間方言を含む）
- (2)宮古島中央部方言
- (3)池間系諸方言（池間、前里、佐良浜、西原）
- (4)伊良部方言（佐和田、長浜、国仲、仲地、伊良部）
- (5)多良間系方言（塩川、仲筋、水納方言）
- (6)大神方言

これらのうち、(1)の宮古島北部方言は狩俣、島尻、大浦方言であり、南部方言は旧城辺の保良や友利、旧上野の新里やその周辺の集落である。ただし、南部地域では語形が一致しない言語地図もいくつかみられるため、等語線をどこに引いてよいのかまだ判断できない。また、(1)と(2)と、(3)以下との区分にレベルの差がある可能性もある。よって、これらは宮古語の地域差を示すグルーピングではあるが、下位区分を示すものではないことを断っておく。

6. 結び

宮古語の地域差について、17枚の言語地図にみられる地域的なまとまりを手掛かりに分類を試みた。その結果、(1)宮古島北部・南部方言、(1)宮古島中央部方言、(3)池間系諸方言、(4)伊良部方言、(5)多良間系方言、(6)大神方言という六つの地域差を示すことができた。しかし、宮古語の下位区分までは示すことができなかった。より正確な下位区分を示すためには、より多くの言語地図に地域的なまとまりを示す等語線を引き、その束の数の数量に応じて精緻な言語区分を行う必要がある。今回は音声的な特徴を中心としたわずかな言語地図をもとに分類をおこなったが、今後は動詞や形容詞などの言語地図にみられる地域差も併せて考えてみたい。

注

¹ たとえば中本（1976）では「宮古方言」と称し、「この方言は多良間島・水納島・来間島・伊良部島・池間島・大神島・宮古島に分布する」（p.80）と述べている。また、かりまた（2012）では「宮古語諸方言（以下宮古語）」（p.70）や「宮古語」（p.71）などと称している。

² 水納方言の詳しい報告はほとんどみられないが、下地（2012）などにより、明らかにされつつある。

³ 地図の基本的な設計は仲間恵子氏によるものである。筆者は各集落の方言語形を分析し、似た語形に類似の「記号」を割り当てるなどして、地図化を行った。

⁴ 本稿の言語地図で「記号」がプロットされている地点（集落）を末尾に資料として示す。言語地図をみる際に参照されたい。

⁵ 中舌母音について、これまで中舌母音のほか、舌尖母音とみる考えや、二つの母音の同時調音とみる考え、子音とみる考えなども示されている。筆者は、母音の音色が観察されること、舌端と前舌面を平面にするつもりで [e] の位置よりもやや上に持ち上げて調音されることにより、「中舌母音」とみなす。詳しくは稿を改めて論じるつもりである。

⁶ 以下、言語地図を墨付き括弧 [] でくくって示す。また、[] の前に地図番号を入れる。

⁷ この地図では大神方言だけ異なる記号を示している。これは語頭子音が有声の [ɖ] ではなく、無声の [k] へと変化したためであり、母音の違いではない。宮古語全体に中舌母音 /i/ が認められる。

⁸ 言語地図03 [針] は「道具」であるため、道具とともに方言語形も伝達された可能性もある。

⁹ 平山 (1964) には「池間方言では68才の翁長春福氏の発音（「老」と呼ぶ）によれば、他の宮古の諸方言と同じく、（花）[paŋa]、（昼）[pi:ma]のように pa 行が体系的に存し、48才の勝連雅夫氏他数氏の発音（「若」と呼ぶ）には、この種の pa 行はなく、すべて（花）[hana]、（昼）[çi:ma]のようになっている」と述べられている。

参考文献

- 内間直仁 1984 「宮古諸島の方言」『講座方言学10 沖縄・奄美地方の方言』国書刊行会 pp.251-287
- 狩俣繁久 1997 [1992] 「宮古方言」『言語学大辞典セクション 日本列島の言語』三省堂 pp.388-403
- かりまたしげひさ 2012 「宮古語の動詞活用 - 代表形、否定形、過去形、中止形 - 」木部暢子編『消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究 南琉球宮古方言調査報告書』大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国立国語研究所 pp.69-107
- 仲宗根政善 1987 [1962] 「琉球方言概説」『琉球方言の研究』新泉社
- 中本正智 1976 「琉球方言音韻の研究」法政大学出版局
- 下地賀代子 2012 「南琉球多良間水納島方言の名詞の格形式」『沖縄国際大学日本語日本文学研究』第17巻第1号（通巻第30号）pp.61-83

項目番号

項目名1 集落名

項目名2 n

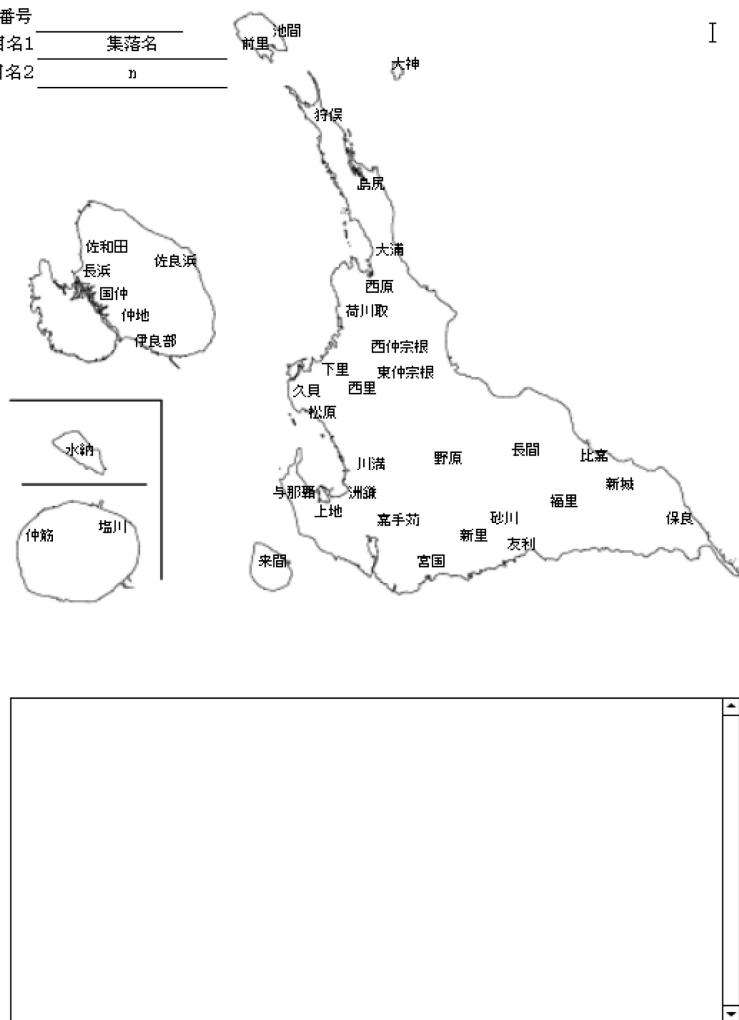


図18